

『オーディオと私』

一、オーディオ事始め

クラブに入会させていただいて、今月でちょうど一年になりました。例会に出席させていただきまして、つづく音楽のこと、オーディオのこと、どれも自分の浅学を思い知らされることばかりで、あつという間に時間が経ってしまいました。さて、諸先輩方にいろいろお話を伺いますと、幼児期あるいは少年期に音楽に接した事で、紆余曲折があったにせよ、現在までの人生の大きな指針となるような影響を受けたとおっしゃる方が多く、今更ながら音楽の力の強大さに感無量の思いがいたします。

私も同様で、幼児期の音楽体験が今の人生の芯を貫いていると実感しております。思うに、私たちの世代に共通しているのは、オーディオの黎明期と発展期、さらに、デジタル技術の進歩による円熟期とも言いましようか、音楽とオーディオ、別物でありながら出所は一緒という不可思議な関係のなかで音楽文化を享受してきたというのが特徴ではないでしょうか。

生の音楽が先にせよ、レコードが先にせよ、音楽を聴くことの喜びを知り、そのギャップに、一喜一憂してきたのが私たちの世代で、その一喜一憂話を例会で拝聴するだけでも他人事とは思えぬ繋がりを感じ、何時も楽しく拝聴させていただいております。

さて私も例に漏れず、なげなしの小遣いはたいてはレコードを購入し、高校生のころからは、せっせとコンサートに通い、オーディオに

目覚め、秋葉原で下車しては憧れの名器を聴かせてもらいに、オーディオ店の試聴室に通い詰めました。今から考えると、よくもまあ、買う可能性の全くない小僧に親切に音を聴かせてくれたものだと感謝の念に堪えません。

二、オーディオに対する疑問

そんな中で、生音と再生音との差について、自分の中にひとつの見解が生まれ始めたのがそのころです。たとえばAシステムとBシステムを切り替え試聴をして、Aはピアノの音は申し分なく、一方Bは弦が素晴らしい。その場合、各々製品の個性を認め、購入者は好きな個性を購入すればよい、というオーディオ界での一般的な考え方、これに大きな疑問を感じ始めたのです。

この疑問の発生は極めて自然なことだと、今でもこの考えに変わりはありません。理由はただひとつ、生の音楽、つまり収録元の音源は唯一無二だからです。

この場合、AとBはどちらも生の音とは異なるのは言うまでもないことです。しかしそれよりも大事なものは、オーディオシステムが道具である以上、各々の個性を認めるということではなく、どちらが生に近いか、優劣をつけることが要求されるのではないかと考えるようになりました。

三、オーディオシステムに要求される性能

ここまでお読みいただいで、ではオーディオ装置の個性は必要なのかと問われることと思います。

まさにそのとおりで私の求める理想のオーディオ装置は無個性であることとなります。個性を求めるその対象は、伝達装置(オーディオ装置)ではなくその発信元である音楽に求めるべきとの考えです。つまりオーディオ装置は実際の姿を正しく映し出す鏡であって、それゆえ、その鏡に要求されるのは、言うまで

もなく、より無色透明でより平滑であることです。

従って、優れたオーディオシステムは理想的には、「黒子」と化したものになるわけで、その存在(歪)を主張した分、性能の悪いシステムであると判断することとなります。

実にみもふたもない事を述べてしまいました。実際には我々音楽愛好者としての立場で言えば、現実の姿を映し出していない音だとしても、心地よく音楽を楽しめれば何の問題もないわけで「自分の姿が美しく映る鏡が正しい鏡だ」という主張も自分自身の満足感の範囲では十分成り立つのもまた事実です。

四、音楽文化におけるオーディオの役割

さて、ここで、音楽愛好者の立場から演奏者の立場に想像力を働かせてシフトしてみたいと思います。

もし、自分が演奏家で、CDに残すべく演奏をするのと仮定した場合、マイクروفオンを前に、何を望むでしょう。送る手の演奏をどのように受け取るかは、人数分の主観が様々な受け取り方をするのは当然として、少なくとも前提条件として、私なら自分の演奏が出来る限り正確に受け手の耳に到達して欲しいと、心から切望します。

私のCD棚には、すでに物故された演奏家の演奏がかなりあります。特に人生の出発点で私の爾後の人生に大きな指針を与えてくれた演奏家たちです。

この演奏家たちの演奏の姿(主張)を出来る限り正確に聴き取りたい。これが最大のモチベーションなのです。

最後になりますが、過去の演奏をより正確に聴きたいという願望はこれはあくまで個人的な願望ですが、私は将来に向けてのささやかな希望があります。

それは、オーディオは音楽文化継承の重要な命綱だと考えていることです。

つまり、絵画や彫刻などは、形が残っているのに対し、演奏芸術は、あたかも火花のように一定時間、一定場所でのパフォーマンスに過ぎず、瞬時に消失してしまう宿命にあります。

これを後世に伝えることこそがオーディオ技術の大きな使命ではないかと考えております。還暦を前に、思っていることを偉そうに述べてしまいました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

横田 一郎

左の写真はリスニングルームにて



左はアンプと電源部の様子

